



第7回

# モーツァルト交響曲 全曲演奏会

2010年10月3日(日)

◆開演◆ 14:30 ◆

会場：ザ・ハーモニーホール  
＜小ホール＞

(松本市音楽文化ホール)

主催：モーツァルト交響曲・全曲演奏会 実行委員会

共催：長野県松本深志高等学校音楽部志音会・松本室内合奏団・松本交響楽団・安曇野シンフォニー楽友会・松本あづみの音楽祭

後援：松本市・松本市教育委員会・塩尻市・塩尻市教育委員会・安曇野市・安曇野市教育委員会・(社)才能教育研究会

信濃毎日新聞社・SBC信越放送・NHK長野放送局・長野エフエム放送・(財)八十二文化財団



よこしまかつと

モーツァルトの作品にはKやKVというケツヒェル番号が付いています。有名なパリ・シンフォニーはKV297(300a)という2つのケツヒェル番号をもっています。今回演奏する交響曲 二長調もKV84(73q)という2つの番号を持っています。なぜこのようなことになっているのでしょうか。第7回の全曲演奏会はこのケツヒェル番号の不思議に迫りたいと思います。

## 目録の謎

モーツァルトの作品はK及びKVという番号で整理されている。Kはケツヒェルという人名のイニシャルである。1862年にいわゆる『ケツヒェル目録』の第1版を出版し、そのなかでモーツァルトの作品に、成立年代順に番号をふった。それによれば最初の作品はト長調のメヌエットKV1であり、最後の作品は「レクイエム」KV626であった。そのあいだにモーツァルトの作品はすべて位置づけられるため、番号の数がすでに作品にたいする暗黙の情報をふくむことになり、番号は作品の顔として愛着の対象とさえなった。

### 【カタログ作りへの情熱】

映画『アマデウス』の印象が強烈だったためだろうか、モーツァルトというわれわれはつい、自己管理のできないルーズな性格の人物を思い浮かべる。だが父レーオポルトは几帳面な管理主義の権化のような人物である。当然モーツァルトも父からの性格の一部を譲り受けている。

その証拠が彼が歴史にさきがけて作った自分の作品の丹念な目録なのである。その自筆の目録は現在大英図書館に所蔵されているが、近年そのファクシミリが出版された(アルビ・ローゼンタール&アラン・タイソン編、コーネル大学出版局、イサカ/ニューヨーク)。そのページを繰ってみると、モーツァルトが自分のひとつひとつの作品をどれほど大切にし、そこにどれほどの誇りを抱いていたかがよくわかる。

原本はA5判の大きさ。ハードカバーの表紙には自筆で、「私の全作品の目録、一七八四年二月から一年 月[空白]まで、ヴォルフガング・アマデ・モーツァルト」と書かれている。なかを見ると見開きのスペースに約5曲ずつ書き込まれている。(図1)

その書体はちょっと女性的に思えるほど丁寧かつ繊細で目録作りに寄せる意気込みのほどをしるばせる。「全作品」といっても、1784年の開始であるから、その数は145曲。ケツヒェルの総数の4分の1以下である。しかし円熟期の主要作品がたいていここにふくまれるわけであるから、その資料的価値には、計り知れぬものがある。それだけに、記入がど

の曲からはじめられたのが注目されるわけであるが、記念すべき第一曲は変ホ長調のピアノ協奏曲KV449(第14番)であった。今日の感覚からすれば、こうした目録作りも特別なことには思われない。しかしこれは事実上、歴史にさきがける行為だった。バッハもヘンデルも、目録を作ることなど思いもよらなかった。彼らはいったん書いた作品をしばしば、目的を変え機会を変えて再生させている。それがモーツァルトにいたってこうした目録の成立をみたということは、作品のひとつひとつが、一回的ないわば人格をもった存在とみなされるようになったということにほかならない。モーツァルトとともにこうした認識の変化(近代的な作品意識の成立ともいえようか)が起こったのである。

(図1)

The image shows a handwritten manuscript page, likely a program note or score for a performance. The page is divided into sections with titles in French: "Le soir", "Le matin", and "Le jour". The musical notation is in a historical style, and the text is in French. The page is numbered "37" in the top right corner. The text includes titles of works such as "魔笛" (The Magic Flute), "ティート" (The Marriage of Figaro), "クラリネット協奏曲" (Clarinet Concerto), and "フリーメーソン・カンタータ" (Freemason Cantata).

自作品目録の最終ページ。《魔笛》、《ティート》、《クラリネット協奏曲》、《フリーメーソン・カンタータ》が並んでいる。



## PROGRAM NOTE

### 【目録のたどった運命】

モーツァルトの死後、『自作目録』がどんな運命をたどったかを追ってみよう。モーツァルトの人気は、死後急速に高まってきたため、出版社は存在する楽譜の蒐集に精をだすようになった。こうなると作品目録の存在がきわめて貴重な意味をもって来る。このためコンスタンツェも売り惜しみ、楽譜のコレクションを急いだブライトコプフに、なかなかわたそうとしなかった。結局その手稿を手に入れたのは出版社のアンドレであった(1799年)。誠実な学者でもあったアンドレはモーツァルトの遺稿すべてを年代順カタログとしてを出版したいと考えたため、1784年以前の作品の扱いに難渋して、作業がなかなか進まなかった。結局アンドレは1805年に『自作品目録』のみを出版、その後自分は目録以前の曲を250曲所有しているとして、あわせて450曲を収録した包括的な目録を出版する予定でいた。結局アンドレの総合目録は1833年にできあがったが、出版はされなかった。しかしこれはケッヒェルが彼の目録を完成させるうえで、重要な資料となった。ケッヒェルの年代順作品目録は、今日では多くの修正が必要であるにしろ、十九世紀に作成されたものとしては、評価すべき精度を誇っている。しかしその完成の背景にはモーツァルト自身による目録の存在と、アンドレらの努力があったわけである。その後モーツァルトの目録は若干の経緯を経て1929年にベルリンでおこなわれたオークションにかけられた。その値段は3万6000マルクであったが、おからの経済危機で買い手がつかず、結局1935年に文豪シュテファン・ツヴァイクの入手するところとなった。ツヴァイクはモーツァルトの遺品中、これをもっとも価値あるものとみなしていたといわれる。ツヴァイクの遺産の一部となった目録は、その後1956年に大英博物館に委託され、86年から大英図書館のライブラリーに収められて、今日にいたっている。

### 【ケッヒェルの目録とその変遷】

話を戻そう。1862年に出版されたケッヒェル(ルートヴィヒ・フォン・ケッヒェル〔1800～77年〕)の『ヴォルフガング・アマデ・モーツァルトの全作品の年代順主題目録』では、モーツァルトの全作品(当時)に年代順の背番号があたえられた。そしてそのそれぞれにたいし、冒頭譜例、自筆譜・初版・筆写譜の情報等が記入された。その体制はファクシミリや実用楽譜の情報、詳細な文献情報が加えられるようになったことをのぞけば、今日と基本的に同じである。ただ研究が進むにつれて、多くの点で改訂が必要になった。新作品の発見、偽作の立証、作曲年代の修正などによって、大原則である「年代順」に根本的な影響があたえられたためである。なかでも作曲年代の修正は作品の位置をずらさなくてはならないという点で、大きな問題を引き起こす。ケッヒェルの改訂版(第2版、K<sup>2</sup>)は1905年にパウル・フォン・ヴァルターゼー伯爵によって出版された。

しかしここでは、わずかな変更しかおこなわれていない。大改訂がほどこされたのは、1936年

にアルフレート・アインシュタインによって出版された、第3版(K<sup>3</sup>)においてである。当時獲得されていた知識と彼自身の直感によって作曲年代の組換えを大幅におこない、不完全な作品や失われた作品をも年代順目録に組みこもうという、大胆な再編成をおこなった。しかしすでに浸透しているケツヒェルの番号をあらたにふりなおすわけにはいかない。そこでアインシュタインは二重番号制を採用する。例でいえば、今回演奏する交響曲二長調はKV84(73q)という二重ケツヒェル番号をもつ作品である。カッコ内が改訂版による新しい番号である。この交響曲二長調は研究の結果、前の番号すなわちKV73の交響曲ハ長調と、KV74の交響曲ト長調の間に作曲されたことがわかった。改訂版は73と74の間に73にアルファベットの小文字を付けて73aという番号を新たに作って割りこませたのである。3曲割りこませる必要があればa、b、cとふってゆく。今回の二長調の交響曲は割り込み順としては17曲番目にあたることからKV73qと表すこととなったのである。ではさらに改訂の必要が生じ73qと73rのあいだに別の作品を割りこませなくてはならなかったらどうするか。その場合は73qAとする。すなわち小文字のあとに大文字をつけて区別するのである。有名な作品のうちでは《小ト短調交響曲》KV183が(173dB)という二重アルファベット番号をあたえられている。(第6版)

### 【待望される新目録】

さてアインシュタインの二重番号は名案ではあったのだが、番号管理をたいへん複雑にしまった。なぜなら、いくつかの作品が動いたことによって一種の玉突き現象が生じ『自作品目録』がはじまるKV449以前の作品の過半数に、二重番号をふらなくてはならなくなってしまったからである。現代の番付けは1964年の第6版(K<sup>6</sup>)によるもので、ここではフランツ・ギークリング、アレキサンダー・ヴァイマン、ゲルト・ジーヴェルススの3人が改訂にあたり、アインシュタインの行き過ぎを改めた。だがこうして流布している二重番号も、ふたたび大幅な改訂の必要に直面している。

それは『新モーツァルト全集』の出版と並行して資料研究が進み、モーツァルト作品の少なからぬ部分に、新しい年代づけがおこなわれるようになったからである。

現在発行されている第8版、第7版は第6版とほぼおなじ内容であるため、根本的改訂をおこなった第9版の出版が鶴首(かくしゅ)されている。その校訂を引き受けたのはアメリカの音楽学者ニール・ザスラウである。彼は以前20世紀のうちにどうしても新目録を出版すると決意を述べていたが、残念ながらいまだ出版はされていない。一日も早く、その新しい目録に接したいものである。

## PROGRAM NOTE

### イタリア旅行

1769年12月から1773年の3月にかけて、モーツァルトは父と共に3度イタリアを訪問している。そのうち2回目と3回目の旅行はミラノからの依頼の仕事を果たすためだったので比較的短かった。それに比べると1回目は長く、1769年12月13日から1771年3月28日まで15ヶ月半に及んでおり、ミラノ、ポローニャ、ローマなどで圧倒的成功を収めたのをはじめ、全部で40もの都市を歴訪している。

モーツァルトは3回の旅行中、舞台作品やほかにもたくさんの曲を書いている。モーツァルトがローマから家に書いた手紙には、自分の勤勉ぶりの強調されたものがある。「この手紙を書き終わったら、書きかけのシンフォニーが待っています。アリアはできています。一曲のシンフォニーは写譜に回っています」。また8月にはこう書いている。「その間に私は四曲のイタリア式シンフォニーを書きました。そのほかアリアを五、六曲とモテットを一つ書かなければなりません」。

そうしたオペラ関係の曲以外ではシンフォニーを多く作っている。シンフォニーは音楽会やオペラの前や後に必要だったからである。KV84(73q)はこの頃書かれたものであろう。

### ●交響曲 二長調 Sinfonie in D KV84(73q)

(14歳 1770年7月上旬 ミラノとポローニャで作曲)

Allegro, Andante, Allegro

このシンフォニーには初期の手稿譜が、ウィーンに、ベルリンとプラハに、さらに2つプラハ(ウィーン以外はレーオポルトとディッターズドルフの作品として)に残っている。

ウィーンの手稿譜にはヴォルフガングの自筆譜やこの時期の真正な筆写譜に見られる類の題辞が2つ、書き込まれている。「ミラノにて、一七七〇年の謝肉祭/序曲」と「ポローニャの騎士ヴォルフガング・アマデーオ・モーツァルト作、一七七〇年七月」である。

両者の情報は明らかに食い違っているが、それは次のように説明できる。すなわちこのシンフォニーは1月か2月にまずミラノで下書きされ、7月にポローニャで改訂されたのであろう。KV73m、KV73、KV73qはブライトコプフ&ヘルテル社の手稿譜目録で、それぞれ第46番、第47番、第48番としてまとめられている。おそらくこれらは、一つの「作品」をなしていたのであろう。



### ●交響曲 ト長調 Sinfonie in G KV124

(16歳 1772年2月21日 ザルツブルグで作曲)

Allegro, Andante, Menuetto-Trio, Presto

謝肉祭は五旬節火曜日に終わり、その翌日灰の水曜日から、40日間の四旬節が始まる。

1772年には、両日はそれぞれ2月3日と4日にあたっていた。モーツァルトはKV124の自筆譜の冒頭に「シンフォニア/騎士ヴォルフガング・アマデーオ・モーツァルト作、ザルツブルグ、一七七二年二月二一日」と記している。したがってこの作品は、四旬節の聖楽演奏会のためか、あるいは4月29日に着任した新大司教のために作られたものと思われる。この大司教はアマチュアのヴァイオリニストであった。シンフォニーが演奏される際、彼はコンサートマスターの隣に立ってオーケストラに加わることを好んだというが、これはおそらく最高の専門的案内を受けるためか、あるいはオーケストラの中心で印象的な力を発揮しているように見えたかったからであろう。

### ●ヴァイオリン協奏曲 第2番 ニ長調

Konzert in D für Violine und Orchester KV211

(19歳 1775年6月14日 ザルツブルグで作曲)

自筆譜による。1780年に修正されたのち1775年に戻されている。

\**Allegro Moderato*, \*\**Andante*, Rondo/*Allegro*

1775年3月7日、モーツァルトはオペラ《偽の女庭師》(KV196)を上演するために赴いていたミュンヘンからザルツブルグへと立ち寄ったが、そのあと1777年9月23日、再び西方のミュンヘンやマンハイムへと旅立つまでの2年半の歳月を、ここ故郷の町で過ごすことになる。ザルツブルグ大司教コロレード伯爵に仕える宮廷音楽家としての日々であった。故郷にあってのモーツァルトの手から詳しい作曲経過の報告が生み出されることは到底期待できない。ただ記録は残されていないまでも、当時のモーツァルトが書き上げた作品を一瞥してみると、宮廷音楽家としての若きモーツァルトが職業柄どんな曲を要求されていたものであるかが明らかになるだろう。1775年の暮れまでの創作活動で特に目立った点はヴァイオリン協奏曲がたてつけに4曲(2番～5番)生み出されていることであろう。[ちなみに1番は1773年に作曲、第3回全曲演奏会プログラムノート参照]。いわゆる《ザルツブルグ協奏曲》と呼ばれるものであるが、モーツァルト自身が独奏を受けもったとも、宮廷楽団のヴァイオリン奏者アントーニョ・ブルネッティが弾いたとも言われている。

[\*, \*\* モーツァルトは1楽章と2楽章の速度表示を書いていない]

## ●25の小品 KV Anh229(439b)

## ディベルティメント 第4番 Divertimento Nr 4

(1781～82年?あるいは1785年頃 ウィーンで作曲)

Allegro, Larghetto, Menuetto, Adagio, Allegretto

25の小品は本来は5つのディベルティメントに分かれている。自筆譜は散失しており、正確な年代設定は不可能。おそらくシュタードラー兄弟のために書かれた。この2人に1781～82年におそらくグリースバッハーが、1785年頃にダーフィットかシュプリンガーが加わったのであろう。初期の出版譜にはクラリネット2本とファゴット(今回はこの編成で演奏します)、または2本のクラリネット、2本のホルン、ファゴット、または2本のバセット・ホルンとファゴットといった組み合わせによるものがあった。

★参考文献 「モーツァルト」メーナード・ソロモン著、「モーツァルトのシンフォニー」ニール・ザスラウ著、  
「モーツァルト大事典」ロビンズ・ランドン著、「モーツァルトの生涯」海老沢 敬著、「モーツァルト=二つの顔」磯山 雅著

MEMO

